

「美術の民主化」

被占領期における関西古美術同好会の展覧会活動について

早稲田大学大学院文学研究科 芸術学（美術史）専攻 博士後期課程

佐藤香里

本発表は、日本占領期に、関西方面の個人美術コレクター約40名によって結成された関西古美術同好会の展覧会活動、特に、「京阪神諸名家蒐蔵 古美術展覧会」(1947年3月30日～4月25日 会場・白鶴美術館)について、GHQ/SCAP文書(国立国会図書館憲政資料室所蔵)を基礎として論じるものである。同会の実務は、美術史家の福井利吉郎が担っていたが、それを推進していたのはGHQ/SCAPに配属されたアメリカ人美術史家であった。

GHQは、そのなかに美術に関する部局を設けた。これを民間情報教育局美術記念物課という。この部局には、ハワード・ホリス、シャーマン・リーといったアメリカの美術館学芸員たちが美術顧問官として雇用され、勤務していた。福井利吉郎は、彼ら美術顧問官の補佐のため、本土爆撃を経た日本国内の美術品の安全を確認するべく、現地調査官という職名で雇用され、近畿地方に派遣された。

美術記念物課は、日本占領の最大の目的であった「民主化」を美術品の展示公開の場で促進することを、目標のひとつとしていた。GHQ美術顧問官は、自国に比した場合、日本においては美術品が個人コレクターの管理のもとにおかれ一般に公開される機会が極めて乏しいことを、富裕層による美術の独占と考え、日本の民主化を阻害するものと捉えた。このようなGHQ側の考えが反映され、福井は関西方面の個人コレクターを束ね「関西古美術同好会」を結成、戦前から私立美術館として活動を開始していた白鶴美術館で展覧会活動を行うようになる。

展覧会の準備段階において、美術顧問官たちは福井や関西古美術同好会のメンバーである個人コレクターの意見を尊重し、彼らの自主的な活動により展覧会活動が行われるよう細心の注意を払った。放任主義的にも感じられるこうした美術顧問官の指導のありかたも、やがては日本においても会員同士の話し合いによって博物館・美術館が民主的に運営されるようにとの行政指導な観点から選択されたものだったことが、GHQ/SCAP文書から確認できる。

関西古美術同好会は、展覧会終了後、阪神古美術の会に発展的解消を遂げ、三回の展覧会を実施した。また、同会に関わった個人コレクターの所蔵品は、やがて彼らの設立した私立美術館に受け継がれ 逸翁美術館(小林一三)、香雪美術館(村山長挙)、細見美術館(細見美術館)、滴翠美術館(山口吉郎兵衛)、黒川古文化研究所(黒川福三郎)など、あるいは公立美術館に一括して寄贈されている 京都国立博物館・上野コレクション(上野精一) 。この点をみれば、GHQの敷いた美術品公開の理念が、戦後の日本において実現されたことが明確に理解できる。

以上のように、本発表では、占領期の日本において個人コレクター所蔵の美術作品の公開が促進された背景に、GHQからの行政指導があったことをGHQ/SCAP文書を基礎として考察する。そして、今日に至る日本の社会教育施設における美術品公開の理念のなかに、日本占領の基本方針であった「民主化」の反映が認められるのではないかとすることを問題提起することを主眼とする。